文化財だより

第 27 号

平成27年３月

発行　真鶴町教育委員会

特集　真鶴に伝わる伝承・民話
～後世に語り継ぐ～

私たちの郷土には立派な歴史があります。その歴史を支えてきた人々にも様々な生活文化がありました。

真鶴町では、昭和三十七年に平井大海氏をはじめとする有志の皆さまにより、郷土の昔の姿を明らかにし、埋もれている文献に残された先人の想いを後世へ残していきたいという目的のもと、「郷土の歴史を学ぶ会」が結成されました。この会は、昭和三十八年に「郷土史研究会」、昭和四十二年には「真鶴町郷土を知る会」と名称を変え、郷土の文化の探究と保存が行なわれてきました。

そして、会員の方々が真鶴の歴史の流れと先人の足跡を探究し、その成果を『真鶴』という機関誌に発表されてきました。

今回の文化財だよりでは、これらの成果をさらに後世へ継承していくため『真鶴』の中の【伝承・民話】に焦点を当てて、町民の皆さまに紹介することとしました。

ここに、「真鶴町郷土を知る会」において永きにわたりご活動・ご尽力いただきました会員の皆さまへ深く感謝申し上げますとともに、今回発行しました

目　次

特集
真鶴に伝わる伝承・民話
～後世に語り継ぐ～……2
「裸稲荷由来記」……3
「まつりのご馳走
『へらへら餅』」……5
「悪さをした
鵜島の河童」……6
「三ツ石沖の
沈鐘伝説
～ぼんぼん鮫～」……8
平成二十六年度文化財
保護事業……

『文化財だより』が町民の皆さまに活用され、真鶴に生きる人々へ語り継がれていきますことを祈念しまして、本号発行の挨拶とさせていただきます。

真鶴町教育委員会

～「真鶴町郷土を知る会」により発行された機関誌『真鶴』～

「真鶴町郷土を知る会」により発行された機関誌『真鶴』及び「真鶴町郷土を知る会」による調査・研究をもとに作成・編集され、真鶴町報へ連載されていた『新・真鶴風土記』の記事の一部を掲載しております。文章は小学生にも読みやすいよう、ふりがなをふり、文字の大きさを今までよりも大きくしております。

また、個人情報に関係する文言や個人名、言葉づかい、さらに当時の町の様子と現在の町の様子の違いなどを踏まえ、一部を再編集して掲載しております。

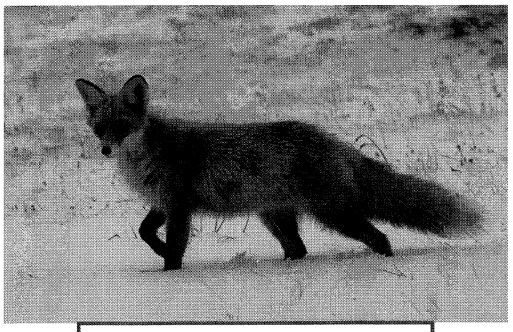
「裸稲荷由来記」

三木　二郎

（出典：『真鶴　第三号』）

公民館まえの一段下った屋敷に祀ってある稲荷を「裸稲荷」という。

むかし―明治時代のはじめ―真鶴・小田原間を往復していた里人が、毎夜のように岩の奥の高丁場あたりで狐に化かされていた。



～実在するキツネ～

いつかは仇を討ってやろうと思っていたとき、ある晩暗くなりかかったそのあたりで

「おじさん、真鶴に帰りたいのだけど、心細いのでいっしょに帰ってくれませんか」と少年が頼みかけてきた。”よし、この少年が狐にちがいない、今夜こそ仇を討つい機会だ“と心に念じた里人は「よしよし、おじさんといっしょなら心配はない。そおら、オレの背中に乗りな」と、少年を背にすると、ぎっちりとその手を握って離さなかった。

村のランプの灯がチラ

チラとみえるあたりまで来ると「おじさんオレ、灯が見えてきたから、ひとりで帰れるよ」と少年はいったが、里人は少年をおぶったまま家へ向かった。里人は家にたどりついて、部屋の戸を固く閉ざし、背中の少年をおろすと、少年は一匹の狐に化し、狂ったように家の中をとびはねたすえ、ついに戸を蹴破って逃げ出してしまった。

A氏の家は、むかしの西念寺の北西の方角に当たり、そこには彫物で飾られた十二支が祀られていたそうだ。狐はその十二支の一つに化けて里人の追跡を逃れようとしたが、探しまわった里人は、十二支の数が一つ多いことに気づき、十二支を一つずつ叩いていったのだった。

化けの皮をはがすというものだろう。ついに狐は正体を見破られて、とりおさえられてしまった。このさわぎにかけつけた里人たちによって、毎夜、下田往還（道路）に出没した狐は皮をはがされ、葬られた。

『裸稲荷』とは、稲荷の使いとされるその狐を祀る祠の名称だという。遠い明治時代のはじめの真鶴に、語り伝えられた話である。

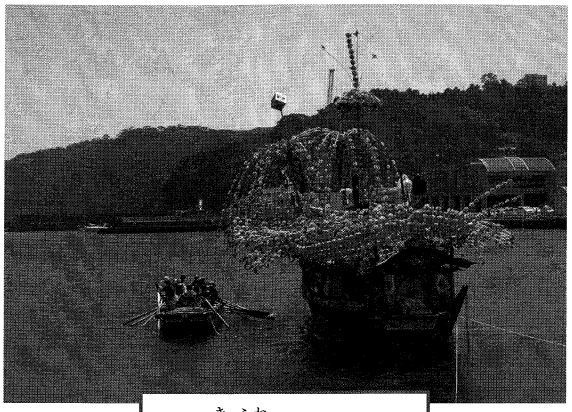
～裸稲荷があったとされる場所付近に残された祠～

※①公民館…現在はなく、西自治会防災倉庫が設置されている。

まつりのご馳走『へらへら餅』

（出典：『新・真鶴風土記』）

貴船神社の祭礼『貴船神社の船まつり』（通称貴船まつり）は毎年七月二十七日、二十八日に開催されている。海のまつりとして、宮城県の塩竈神社、広島県の厳島神社の船まつりとともに、日本三大船まつりに数えられている。国の重要無形民俗文化財に指定されており、わが郷土の誇りとして守り、継承していくべきものである。



～貴船まつり～

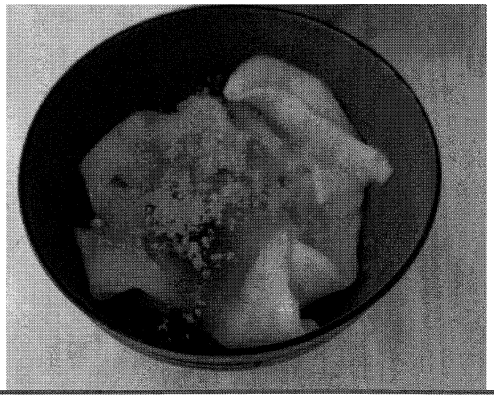
さて、貴船神社には神事始めともいうべき伝説がいまも語りつがれている。遠いむかし、平井の翁という人が毎夜、沖にあらわれる「奇し光」をながめ、これを迎えあがめたのが、神迎えのはじめだと言われている。海の神を迎える典型的な漁村における渡来伝説であり、神社の所在地が港口にかかる点とともに、全国的にも似たような例が多い。

この神社に残された言いつたえとは別に、土地の人の口から口に言いつたえられた歴史、すなわち口碑というタイプのものもある。真鶴の場合、これを証する風習がある。

―むかし沖につりに出た里人がいた。そのときに船で近づいた高貴な姿の神があった。神は空腹を訴え、里人に食べものがほしいと願った。貧しい土地のため食べ物らしいものもないので、里人は昼食用として持参した麦の粉を練った餅をさしだし、空腹の神を満足させた。神はお礼として「何でも願いをかなえてやろう」といった。わずかな善意によって神のよろこびを得た里人は、おそれながらと「この里は貧しく十分な食べ物がとれないので、飢えから救われるだけのてだてを願いたい」と申出た。神は快くこれを認め、それから里人たちはたとえ貧しくとも飢えに苦しむことはなくなったという。

―

神社に残された言い伝えにくらべ、食べものに終始するくだりは、庶民の願いらしく真実味がある。



郷土料理として親しまれる「へらへら餅」

人によっては素朴と言うかもしれない。しかし、飢えから逃れたいという本能こそが最も強いものであり、人間らしいと言える。

今でも古老は言う、「まつりの本当のご馳走は『へらへら餅』だよ」それがあの神と接した里人の食べものだったわけだ。その

里人は東の山すそに住んだB家の先祖だという。今でも神が東浜のお仮屋に移る祭礼の夕方、B家ゆかりの刑部さんの奉納する神酒が、神の正面に捧げられていることを知る人は少ない。

「悪さをした鵜島の河童」

（出典：『新・真鶴風土記』）

海の恋しい季節になると、幼いころ聞かされた鵜島の河童のことを思い出す。

鵜島の製氷会社からトロッコの通る橋でつながった岩の島だが、いまは埋立地内に入り、ついこの間まで一部が港に露出していたが削り取られてしまった。真鶴村書上げ帳に「鵜の鳥がとまったので鵜島とした」とあるが、江戸時代からの呼び名であろうと思われる。

鵜島付近は地下水が混じるのか、夏泳いでいても水に砂糖を解かしたときのように、何かキラキラし、水温の差があって気持ちのよいものではなかった。昭和のはじめの築港工事で鹿の角が出てきたという。古いころ鹿が港で遊んでいたものだろう。

そんな場所であったが、鵜島の河童が幼い者に悪さをするので、夕方のひとり泳ぎはいけないと注意されていた。小学校一年生のひと夏、友人のC君はここで溺れて浮いていたという。九月の新学期、クラス全員で葬儀に参列した。河童が悪さをするなんてあるのかな。私は友人の死につながる鵜島を嫌ったが、河童を憎むことはできなかった。

築港工事前の鵜島（写真中央）

そもそも河童は妖怪変化として扱われているが、もとはれっきとした水神で、その落ちぶれた姿が猿やカエルのような容姿となったものらしい。水神が母とするなら河童は童子、もともと猿の仲間として数えられていたので猿田彦神とも縁が深い。

河童はカッパ、カアッパと呼んでいるが、エンコ、エンコウともいわれた。猿猴とは猿のことかと思うのだが、真鶴岬の赤壁を書上げ帳ではエンコウの画があったと地名の由来に拾っているが、―エンコウが河童のことなら

これはおもしろい。同族扱いされているのに猿は河童をみると必ず争ったというし、河童はまた相撲好きで、誰にでもいどんだ水の精霊のようだ。

多くの画家、芸術家などがその姿を描いているが、芥川龍之介、水野葦平のものは少し凄味が出ている。葦平の生地九州にはこの河童の伝説が多く、様々な場所でしきりに出没している。葦平もその特徴ある姿を限りなく愛していた。奈良県吉野では、山へ移ればヤマタロ、川に入っている間はカワタロと区別している。田の神と山の神との春秋の去来と一致をみるところに、古代日本人の思想を読みとれる。ヒョウヒョウと鳴きながら移動するというこの河童、真鶴の人の口から語られなくなって久しい。

享和元年水戸藩東浜で捕まったとされる河童

右写真引用元ホームページ
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B2%B3%E7%AB%A5

「三ツ石沖の沈鐘伝説～ぼんぼん鮫～」

（出典：『新・真鶴風土記』）

いつごろのはなしであろうか。老人たちは「むかしなあ」と語りだすのであった。

むかし、上方（関西）から東国に向かった船が、航海のおわりも近づき真鶴の笠島（三ツ石）沖にさしかかった。風は追い風、帆をいっぱいふくらませ、船は青い海面に白波をけって進んだ。

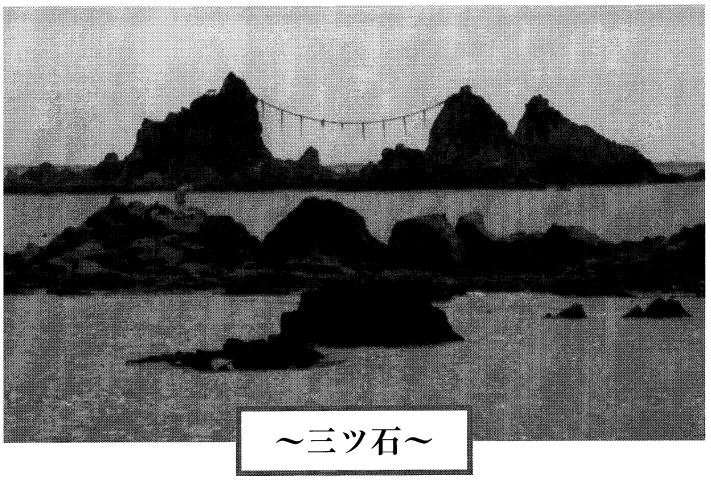
―と、そのとき船足ははたと停まってしまった。驚きさわぐ水主[※②]たちを制した船頭は、積荷の中のひときわ大きな鐘を甲板に出させ、海に投げ入れるよう命じた。力をあわせる水主により、鐘は身をひるがえすように水中に沈んでいく。白い泡だけが大きく小さく、いつまでも浮かび上がっては消えていった。船は走り出した。水主は喜びの声をあげ手をたたいて踊りあがる者もいた。船頭に尊敬の眼を向けた。

しかし、船はしばらく進んだだけで、再び停まってしまった。一体どうしたというのだ、と、さきほど手をたたいて喜んだ水主たちは、おびえたように顔

をひきつらせ、すがりつくように船頭をみた。じーっと眼をつむって考えていた船頭は大きな声で叫んだ。

「次に大きい鐘を投げこめ！」

鐘は沈んでいく。白い泡が浮き、それが消えて底深い水の色となったとき、船は静かにすべりだし真鶴の浦べに碇を下した。船頭は積荷の中に残った小さな鐘を水主たちにかつがせ、村の小高い丘の清涼山常泉寺に納めさせた。

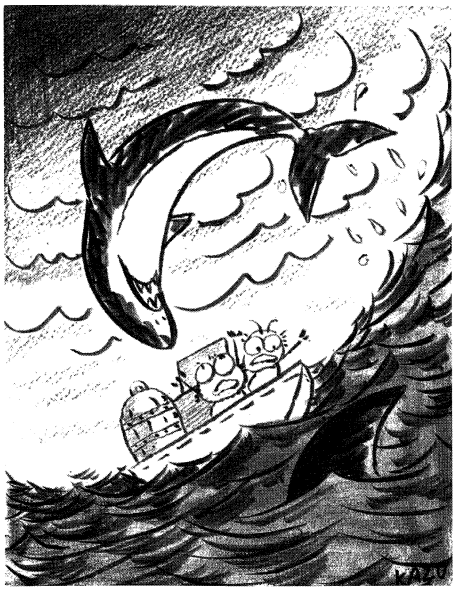


～三ツ石～

三ツ石沖で船を停めさせたのは、長い年月この海の底に住みついた鮫の夫婦だった。船頭はそれを覚ったのだ。―だから両親を鐘の中に封じこめられた子鮫たちは、親を慕ってその尾で鐘をたたくため、いまでもボーン、ボーンと潮騒のはてから鐘の音が聞こえるのだという。村人たちはいつからかこれを『ぼんぼん鮫』とよぶようになった。

以上は真鶴の数少ない伝説のひとつであるが、隣の福浦ではそれぞれに封じられた夫婦の鮫が呼びあうものだ、としている。親子と夫婦ではイメージが異ってくるが、そこはかとない悲しみの裏に仏の教えの存在することが読みとれる。

沈鐘伝説は全世界的なもので、地名に付会する場合もある。鮫―蛟―竜という順に考えを及ぼしていくと、貴船神社にある船玉竜神の社にたどりつく。竜神を信仰した部族の鎮魂と読みかえてみると、この伝説への理解が深まるだろう。



※②水主…水夫（船乗り）のこと。

県内視察報告 二月十日

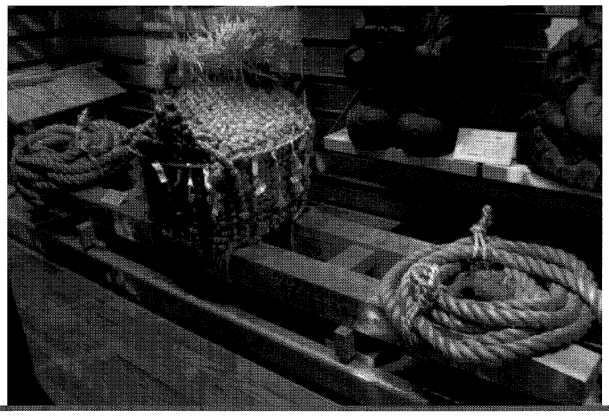
・大磯町左義長保存会会長宅（芦川酒店）
・大磯町郷土資料館
・鎌倉市立鎌倉国宝館

『大磯町の左義長』は、国指定重要無形民俗文化財に指定されています。今後、真鶴町で無形民俗文化財の指定を考えていく際に、参考となるよう大磯町左義長保存会会長、大磯町生涯学習課担当職員様より祭りの概要や活用に当たっての創意工夫、存続にあたっての課題点等、お話を伺ってきました。

左義長保存会会長芦川様からの解説聴取

大磯町郷土資料館では、企画展として『大磯町の文化財』をテーマとして、指定文化財やその模型、複写資料などの展示を行なっておりました。

鎌倉市立鎌倉国宝館は、その建物が登録有形文化財建造物に登録されております。真鶴町の後世に保存すべき建造物についても、今後随時研究を進めて参ります。



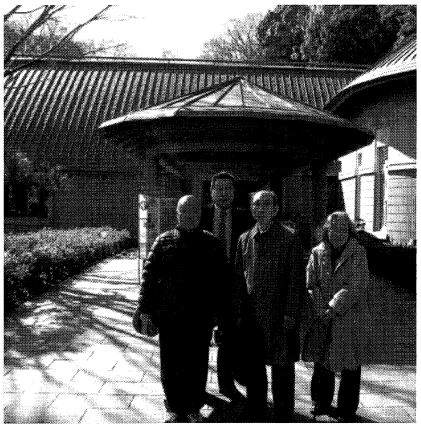
大磯町郷土資料館にて展示されていた左義長の道具類

平成二十六年度文化財保護事業

◎文化財広報啓発事業
- 文化財だより二十七号発行
- 町民センター・民俗資料館展示事業
  各施設での企画展示を実施

◎文化財審議委員調査研究事業
二月十日
大磯町、鎌倉市への視察研修を実施

◎文化財審議委員協力事業
- 教養講座くすのきゼミ
  講師　小野間　松男　委員
  十月二十四日　開催
  『真鶴八詠を歩く
  ～真鶴八景の今昔』



大磯町郷土資料館にて

挿絵　（頁三　二段目、頁七　四段目）引用元
著書　『私たちのふるさと昔ばなし』
編集　㈳小田原青年会議所総務委員会
発行日　一九九六年十月一日
発行所　㈳小田原青年会議所
印刷・製本　コーレー株式会社
引用ページ　頁九十七、百二十三